つたのみ日記（その一）

坂元　彦太郎

はしがきとして――

お茶の水の附属幼稚園の園舎の外かべには、つたの葉がまつわりついていることは、一ぺんでも訪れた方には印象に深く残っているであろう、と思われる。夏の新緑も美しいが、秋の紅葉はいっそう美しい。それが、園内の多くの常緑樹や花々とうつり合って、ほんとうに楽園のような空気をかもしだしている。

一昨年のこと、アメリカシロヒトリという害虫がはびこって、またたく間に、このつたの葉をすっかり丸坊主にしてしまった。まだ九月のうちであったが、つたの樹をいとほしく思って近づいて見ると、まだ緑色をした小さなつぶつぶの実があちこちにしっかりと幹や枝にしがみついていた。

昨年の秋も、つたの葉が美しく紅葉した。その葉をめくって見ると、やはりあちこちにしなびたような小さな実のかたまりがひそかに存在を保っているのであった。

すっかり落葉してから、私はむき出しになっている、むらさき色のつぶつぶのかたまりを、庭にでるたびに眺めたり、さわって見たりした。ひとびとがほとんど見向きもしないであろう、小さないのちのかたまりに、何ともいえない愛情を私はもつようになった。

陽にあたったり、霜におそわれたりしたせいであろうか、年を越すと、つたのみのかたまりは、やせてしなびこけてしまった。しかし、それでも、はっきりとつたの実はのこっていた。

そして、よく見ると、昨年の実だけでなく、一昨年の実も、その前の実も、いっそうやせこけてしまって、人間なら皮ばかりになっているが、その年令の古さがうかがわれるような仕方で、枝にしがみついているのであった。わたしは、それに決して意地汚なさを感じはしなかった。生の執着といったものよりも、ひそやかにかくれて、しずかに生きづいている永遠につづくいのち、それも決して盲目的であったり、誇らしげであったりするのでなく、ひっそりと、つつましやかに生き抜いている姿を感じとったのである。

そして、全く論理的にはひどい飛躍なのであるが、これがそのまま、この幼稚園のすがたであり、あるいはまた、私自身の生きてきた道であり、あるいは、幼児教育の歴史のどこかを象徴しているものであるかのような、感じを私はもってしまったのである。

つたの実みたいに、ささやかなとるに足らないものであるかも知れないが、それなりにひそやかにいきづいているいのち――幼児教育もそういうものであり、そして、そういうものとして、これから、いつまでか知らないが、つたの実のように、考えたことを書き残していって見よう、と私は、いま思っているのである。